

公開講演会発表要旨

象嵌遺物の保存科学的研究 象嵌遺物の保存処理を進めてゆくには、その象嵌の特徴を正確に把握することが重要である。このため、材質調査や構造調査等の事前調査を十分に行った後、実体顕微鏡下で表出作業を行う。今回は、古墳時代では初めての銅象嵌を施した鉄刀の保存処理について発表したものである。この銅象嵌の場合、今までに見られている金・銀象嵌に比べてより細い銅線を用いていた。銅象嵌を表出するため、鉄サビを削り落とすのだが、同時に材質分析も平行して行い、銅線に鍍金が施されていないかなど、細心の注意を払った。また、鉄や銅は塩化物の影響を受けて腐食が進行するので、脱塩処理を行い、刀身全体はアクリル系合成樹脂を含浸して保存効果を高めるよう工夫した。(肥塚隆保)

縄文文化の起源 日本における最古の土器を追求することにより、「縄文文化」がいかなる社会的基盤の上に成立したかを考えたい。土器・石器・動物遺存体など各種遺物の検討では、日本の最古型式の土器は、大陸方面からの土器製作技術伝播の結果、日本に定着したものと考えられ、その後の縄文式土器につながるものと言えよう。また動物遺存体の出土種・石器種の変遷から、日本における土器の発生は、気候変化に対応する狩猟動物相の変化に伴う文化変容ではないとすることができる。すなわち縄文文化の起源は、停滞的な始源文化ではなく、土器使用の開始というカルチャー・ショックにより、アジアの東端に位置する島国でひきおこされた文化変容現象であるとする事ができよう。(土肥 孝)

番付墨書からみた室町・桃山建築 野小屋の成立に伴って獲得した奥行の深い平面、自由な柱配置など構造的変化により、15世紀初頭には回り番付・時香番付・数字組合番付が既に各地に成立している。この時期は縦挽鋸の使用、請負工事の出現、職名としての「棟梁」の登場と併せ、生産・技術史上の一大画期となる。その後番付がさらに型式分化して播磨・信越など地域性が顕著となる様は室町建築界の特色である。建築界の中心、京都で成立した時香番付は畿内からさらに街道沿いに伝播し、一方大和では古代以来の方位番付に徹して根強い伝統を物語る。桃山時代後半には小屋組専用番付としてイロハの組合番付が京都で考案され、軸部と小屋組が構造的分離を遂げて近世に移行したことを示し、以後全国的に隆盛する。(清水真一)

古代の武具―飛鳥寺塔心礎出土の挂甲― 飛鳥寺塔心礎出土の挂甲は、その年代が限定される数少ない資料である。挂甲を構成する小札の分析、横縦じの方法、緘し方やその素材の検討、着用方法の復原的研究などの結果、飛鳥寺出土の挂甲は、基本的には古墳時代の挂甲と同じであるが、腰の部分に外反する小札を用い、草摺部の腰前で重なりを多くとるという違いがある。その結果、従来の挂甲より、腰回りにゆとりができて動きやすくなり、裾も前で左右に開かない。これらの点は、技術的に新しい要素であり、防禦具としての機能性の改善と認められる。時期的、形式的に、古墳時代の挂甲と正倉院伝来の挂甲との接点にある飛鳥寺出土挂甲は、大鎧の成立に到る古代の武具の変遷を考えていく上でも重要な意味をもつ。(小林謙一)